北部ラオスの少数民族

――特にヤオ族に関して――

岩田慶治

【要約】北部ラオスにはラオ族をはじめ、メオ（苗）族、ヤオ（傜）族、カ・ムー族（プ・テン族）など多数の種族がそれぞれに立地を異にしながら入交つて分布している。そこは種族構成の複雑な地域であり、文化的にきわめて複合的な地域である。筆者はここで地域をパ・タン村周辺に限定し、主としてヤオ族を中心に右の種族関係を多少とも明らかにしようと試みた。すなわち先ずカイソー村のヤオ族に関して、その生活一般、集落および家屋形態、社会組織、宗教の一面などにつき調査粗資料の若干を提供し、つづいて彼等と周辺諸種族との接触、交渉の様相を示す。ヤオ族を単なる少数民族としてではなく、北部ラオスにおける地域文化の一部を担うものとして彼等の存在理由を評価したいのである。パ・タン村周辺地域についてみると、山地にはヤオ族・メオ族が居住し、山腹・山麓部にプ・テン族、河谷平野にラオ族が居住しており、これら諸種族間の文化的交流によつて全体としての地域文化が豊富化し、進化してゆく。ヤオ族が欠ければラオ族は単なる谷間の農民でしかなく――商業民族としての才能が開花せぬ――、ラオ族が欠ければヤオ族は山頂に孤立し、その生活は停滞する。また、プ・テン族が欠ければ両者――ラオとメオ・ヤオ――を結ぶ仲介者・物資運搬者が欠けることになる。問題は個々の種族文化の現状を究明するとともに、それらの構成する地域文化の秩序を看過しないことである。民族地理学的アプローチよりすれば地域文化がそれぞれの種族生活を変容せしめ、ひいては歴史を動かす主体である。ただし、調査時日に余裕がなく、従つてここには十分に筆者の意を尽すことが出来なかつた。

はじめに

一九五七年九月より翌五八年四月まで筆者は東南アジア稲作民族文化綜合調査団の一員としてタイ・カンボジア・ラオス諸国を旅行したが、そのうち一九五八年一月より同

住の原始林がひろがつているわけであり、従つて図上に色わけされた地域の広狭は全く問題にならない。その点でFrance Asie 所収の図がカ・ムー族の分布――ここではTsa Khmu としてある――を著しく散在的に取扱つているのはよい。一体、彼等は何処からこの地域に移住してきたものであろうか。東からはタイ族の波に圧され、西からはチベット・ビルマ族の波に圧されて、現在はこの地域を中心に安南山脈ぞいに南下しているが、かつてはもつと多く、あるいはより広域に強度に散布していたに違いない。しかし今は、このままでは将来に希望のない落ちぶれた民族である。第三の種族メオは北部の雲南国境から南はヴィエンチャン北方の山地――Phou Khao Khoai といい、そこに未来の避暑地 Ritaville が建設されようとしている――に至る間、飛び飛びに山地に分布している。もちろんメオ族内部にもさらに種族の別があるが、詳細は不明である。パ・タン村付近ではメオ・カーウ（白苗 Meo Khäw）、メオ・ラーイ（Meo Lai）の別が知られている。[9] 最後にヤオ族はトンキン平野の北部、および西部山地に多いが、ラオスではサム・ヌーア南部、ナム・ター Nam Tha 周辺、ポンサリー Phonsali 西北部およびトゥラコム Tourakom 西方にみられるだけであり、しかもこの最後の場合は或いは誤記ではないかと思う。もちろん地図に記載されていないルアン・プラバン付近、パ・タン村付近にもヤオ族の村があるように、他にも記載もれはあることと思うが、それが極めて少数であろうことは間違いない。ちなみにタイ国においては北部のナーン県に若干居住している。[10] 何れにしろヤオ族における生活空間の拡大は、谷間のラオ族のそれのように一歩一歩着実に前進してゆくというのではない。ルアン・プラバン付近のヤオ青年が徒歩三日がかりで、しかも気軽にパ・タン村に近いヤオ部落を訪問して帰つてゆくように、たまたま筆者の所持していたトンキン高地の同族の写真をむさぼるように眺め、その住地を手帖に書留めてゆくように、彼等には彼等なりの地理像が描かれてをり、そのなかにあつて一見大胆ともみえる移動を行つているのである。これが著しく散在的な分布の背景をなす少くとも一つの事実である。もつとも彼等のそれと条件を等しくする生活の場が、ラオスではすでに優勢なメオ族によつて占拠されていたということも考慮する必要があろう。

北部ラオスにはなお他にも少数民族がみられるが差当り本稿と無関係であるから省略する。

さて、問題をヤオ族に限定してさらに視野を拡げ、南シナ一帯における分布を展望してみよう。もつとも、そのための資料として筆者の手許には Bernatzik[11]、Eickstedt[12] などの略図と Wiens のそれがあるに過ぎない。そして、これらによつて知り得ることはヤオ族が今日なお広東・広西・湖南・雲南など、要するに嶺南山地にひろく分布していることである。これを Wiens の描いた古代における同族の分布図と比較することが許されるならば、かつては楊子江以南の南シナに広汎に散布していたものが、徐々に上記山岳地帯に追いつめられるに至つたものであろうことが推測される。果して右のごとくであろうか。

Wiens[13]は南シナにおける諸種族関係を次のごとく要約している。(1) Chuang (僮) 族、あるいは T'ai 族は河谷平野に分布する水田農耕民であつて、多数の母権的要素をまじえた父権制の種族である。この Chuang 文化の中心地は広西にあるが、広東の大部分を含み、さらに福建・浙江・江蘇・湖南・貴州・四川・雲南・江西にも及んでいる。雲南では少数民族として比較的孤立した地位にあるが、東方では古代越文化の成立に大いに貢献したものであり、貴州・四川では局地文化となつて元来の Chuang 文化から変化していつた。(2)ヤオ (徭) および Tan (蛋) は共に paleo-Austronesian で、山地における焼畑耕作と犬神話 (たとえば盤瓠説話) を持つ点に特色がある。この種族群の一派は水上生活に習熟していわゆる南シナ boat-people となり広東・福建に拡がつている。蛋民である。一方、古代の越文化は Austronesian の創つた最高の文化であるが、そのなかには Chung ないし T'ai 文化の影響をうけたヤオ文化が保存されている。ところが越の崩解に伴つて住民は安南・東京へ移住し、あるいは漢文化と混淆したのであるが、その後に再びヤオあるいは Tan 文化が露れてくる。すなわち当時、それまで隠れていた Austroasiatic の基層文化 (sudstratum) すなわち Liao(徭) 文化が、その純粋型としてではなく、Chuang あるいは Yao 文化として顔を出したのである。もちろん、一方にはチベット文化の影響をも見逃すことは出来ない。殊に Pa, Ch'i-lao, Miao, Liao 諸族におけるそれは顕著である。——かくして南シナにお

ける種族・文化構成は極めて複雑な構図を示すことになるが、要するに1 Chuang, T'ai 文化、2 Yao, Tan を代表とする Austronesian 文化、3 Liao の Austroasiatic 基層文化ということになる。

ところで以上の Wiens の要約は、Eberhard, Eickstedt, 徐松石・江応樑・凌純声などの研究によつたものであるが、勿論、これら諸氏の研究成果がすべて一致しているわけではなく、しかもそれぞれに可なり大胆な仮説を含むものであるから、それらの要約としての敍上の考え方も興味あるものではあるが完全に信頼し得るものとはいい難い。例えばヤオ族の故郷、民族移動の方向および経路、隣接種族との関係などについてみても、そこには少からぬ見解の相違がある。

Eickstedt[14] はヤオ族の故郷をかつての好戦的なタイ族の国家、呉・越の南方に求め、そこでヤオ族固有文化が誕生したと考えた。従つて、ヤオ族の今日の分布——広東々部・広西々部・雲南東部・貴州など——が示すように、彼等はそこから南シナ一帯に勢力を扶植していつたものであり、福建の Hsia-min 畲民は広義のヤオ族であり、Dschuang 僮族もまた著しくタイ化したヤオ族、ないし vor-Yao であるという。このようにヤオ族は——タイ族ではなくて——南シナ海岸地帯の最古の住民 Urbewohner であり、タイ族が——ヤオ族ではなくて——これにつづく民族の波なのである。Eickstedt によるとヤオ族の言語は当初からモン・クメール語族 monkmerische Sprache に属する。

凌純声[15]の意見は次のごとくである。すなわち、古代の蠻は今日の傜人と畲民であり、広義の蠻、苗は同族である。しかし狭義の蠻は槃瓠の子孫のみを指すのであり、湘・粤・桂・滇四省にいるものが傜人・閩・浙二省に散在しているものが畲民、安南・東京北部にいるものは今も蠻といわれている。大板傜の自称が Man Coc, 藍靛傜の自称が Man Lan Tien であるように蠻は傜の自称である。ところで蠻の住地についてみると、三代以前には河南西南部にをり、周代には江漢流域にいて荆蠻といわれた。漢代には武陵蠻がをり、唐代には莫傜という名がみえる。宋代には蠻傜・傜人といわれ、当時すでに五嶺をこえて南下し両粤の地に分布していた。のち二派にわかれ、東派は粤から閩・浙に

入り畜民となり、西派は桂をへて滇・越辺境に入り今日まで蠻といわれている。湘・桂にとどまつたものが傜人である。

徐松石[16]の『粤江流域人民史』には処々に疑問の箇所があるが、全体として筆者には有益であり興味があつた。それは彼の自由な言語学的解訳によるところが大きい。ところで彼によると傜族の故郷は江蘇・浙江・江西・福建の諸地方であり、ここを根拠地として先づ傜が興り、次いで太湖周辺を本拠として苗が、西南に徭が興つた。其後、傜族は西南方向への民族移動を行つたが、その証拠として彼は、1、盤古の地名が江西、江蘇、湖南より両広にわたつて分布すること、2、広西板傜の伝承に江西・福建の出自を伝えるものがあり、あるいは会稽より渡海して楽昌に至つたと称するなど、上記の移動を裏付けるものが多い、3、同じく江西出自を伝える歌辞の存在、4、その他の言語分布上の事実をあげている。つまり、彼に従えば傜族は先ず西南移動を行い、然るのち西方移動を行つてインドシナ半島に分布するに至つたということになる。

傜族の移動に関して以上の諸説は何れも大局的には相似の方向を指唆するものであるが、これらと対立する意見もないわけではない。江応樑の意見がそれで、彼は通説に反し傜族は海岸沿いに北東移動——南西ではなく——を行つたというのである。この場合の移動経路は湖南から広西に下り、広東に入り、Kuei Chiang を経由し Hsi Chiang から Kao-chou に至つた。明代には彼等はこの地に優占して繁栄したが、同中期以後漢族に圧迫されて東北方向に移動をはじめた。すなわち Ch'ao-chou, Shan-t'ou を経、さらに福建・浙江に至つたのであつて、ここでは傜族は畜民と呼ばれているという。——要するに傜族移動の足取りは必ずしも明瞭ではないのである。

筆者の意図は南シナにおける傜族分布の背景をさぐることであつたが、結果は右のごとくであつた。傜族の故郷が南シナ東部にあるという点では諸書のほぼ一致した見解であるけれども、その後の移動方向、隣接諸種族との親縁関係について不一致の点が多く、言語の所属についても、あるいは austroasiatic といい、あるいは proto-Austronesian と称するなど未詳である。最近、Benedict は苗・傜語をタイ、カダイ、インドネシア、モン・クメール、安南諸語

とともに原オーストリック proto-Austric 語に属せしめたが、これとても一般に承認されるまでに至つていないようである。[17] これらの点に関して中国史書の詳細な検討が必要かと思われるが、筆書はその知識に欠けている。しかもそれらは証明よりも解訳に重点があるらしく、甚だ取扱いにくいものである。従つて傜族の故地、民族移動の足取りを明らかにするためには南シナにおける民族学・考古学的調査の進展と、例えば栽培植物系統論のごとき分野の研究にまたねばならない点が多い。ここでは、1、南シナにおける傜族の分布は北方からする漢族の圧迫によつて嶺南山地一帯にひろく散布している。しかも彼等の文化は漢族との長期の接触・抗争と周辺諸種族、ことにタイ・苗・その他との交流の結果、著しく複合的なものになつていること、2、上記分布の西縁が北部ラオスにあたり、3、さらにその南端がパ・タン村付近に達していることに注意したい。パ・タン村付近はいわばヤオ族の西方フロンティアーである。従つてここは単にヤオ族の文化・社会の一例が観察されるというだけではなく、それが諸種族との間に相互交渉をたもち、文化的複合関係を組成している点で北部インドシナから南シナに連なるヤオ族地域文化の一標本でもある。何となればヤオ族の分布は彼等の移動の足跡であり、彼等の移動はそのまま諸種族交渉史を示すものに外ならないからである。

二　ヤオ族の文化と社会

今日のヤオ族における文化と社会は一体どのようなものであろうか。この点こそ実は最初に、そして綿密に検討されるべきことであつた。Eberhard は次のごとく要約している。[18]

経済――焼畑農業に依存する山地居住、従つて住居の移動は頻繁である。狩猟と採集を行い、塊茎植物の栽培が中心になつている。

社会組織――支配階級も部族組織もともに未発達、強力な父権的氏族 patriarchal clan 組織がある。族外婚制をとり、交叉イトコ婚も少からずみられる。歌垣の風習をもち、自由婚 free-marriage、正式の結婚は子供が生れてから行われる。成年式、一種のシャーマニズムがみられる。

宗教――犬神、槃瓠 P'an-hu 崇拝。犬タブーおよび虎崇拝と

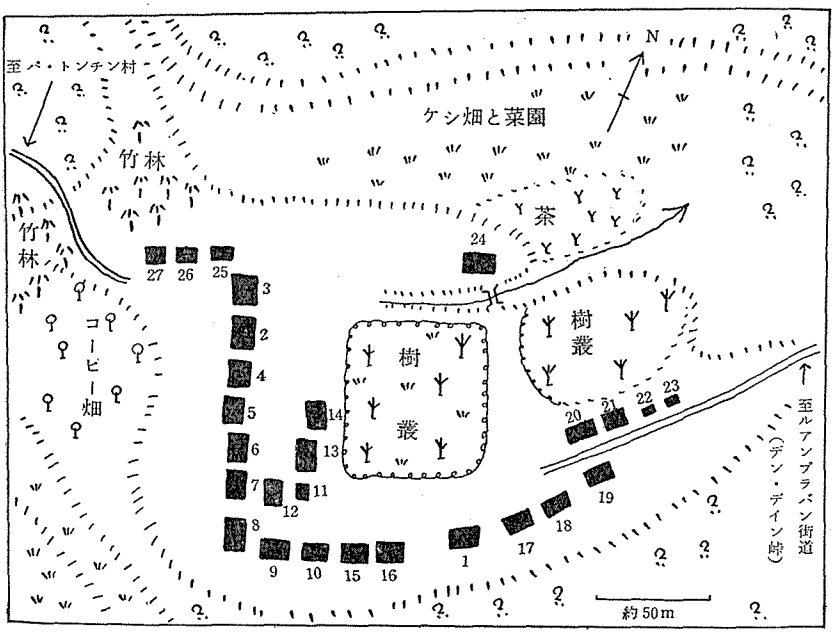
虎タブーが行われている。歳末に仮面儀礼NOが挙行される。祖先の位碑をもち、祖先崇拝（先祖まつり）が行われる。死者は棺に入れて土葬される。

物質文化――テラスを持たない土間式の平屋に住む。土間の中央に炉があり、周囲に寝所がある。矩形の間取りの一隅が台所となり、そこにカマドがある。概して小家族向きの家屋である。短いコートを羽織り、靴ははかない。髪形を入念に整える。衣服はしばしば部族の説話と関係がある。運搬用のバンド（額にかける）がある。

以上はヤオ族一般についての概括であるが、これにたいして北部ラオスにおけるヤオ族の実態はいかなるものであろうか。[19] 以下、特に註記する場合を除いてバン・カイソー Ban Kaisou（街士寨あるいは街士村）のヤオ族に関する観察を記すことにしよう。

(1) **家と集落**　パ・タン村付近の山地にはヤオ族の村が三つある。すなわち、カイソー村、パ・ルアン Pha Louang 村、パ・ナム・ピン Pha Nam Pin（南並）村の三つで、何れも標高一、〇〇〇米ないし一、七〇〇米の山地に位置している。北隣のムオン・カッシー Muong Kassy（パ・タン村はムオン・ヴァンヴィアンに属している）[20] にはパ・ティウ Pha Tiou 村というやはりヤオ村落があるが、パ・タン村のラオ人と交渉のあるのは前記三村のみである。カイソー村は戸数二七でヤオ族の村としては大村であるが、他の二村はごく小さくパ・ルアン村五～六戸、パ・ナム・ピン村七～八戸ぐらいである。ルアンプラバン近傍のヤオ村落のなかには一村が若干部落にわかれている――例えばパ・コーム Pha Koum 村はニャ・カー Nja Kha 部落（二五戸）、オム・セ Om Se部落（四～五戸）、タム・ヤット Tam Yat 部落（十戸）にわかれている――ことがあるが、この付近の村は何れも一村一部落、つまり一人の村長 Nai Ba:n が一部落を支配している。

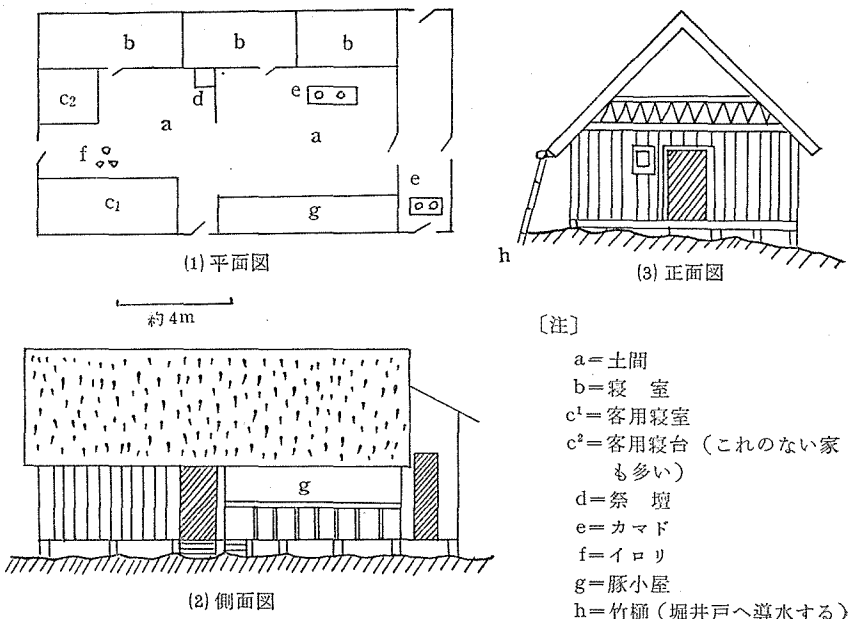
パ・タン村からカイソー村へゆくには徒歩――時にトラックを利用し得る――デン・ディン Den Din 峠にいたり（約四時間）、右折して森林地帯に入る。幅約三米の小川に渡された孟宗竹の一本橋――のち改修された――を渡り、直ちに山腹の急斜面をのぼってゆく。処々に丸太を組んだ休息所――ヤオが荷物運搬の際休息する――があり、雨の際にかくれる巨岩の洞がある。一時間余りで尾根にとりつ



第2図　カイソー村略図　（主屋のみを示す，数字は家族番号，1は村長の家）

き、そこから斜面を横切つてゆく。しばらくすると竹の門（柵）があり、ここがカイソー村の入口と思われるが既に竹は朽ち果てている。さらに一時間余りして小鞍部をこえると突然視野がひらけ石灰岩峯にかこまれたすりばち状の盆地にヤオ族の村があらわれてくる。まさに豁然開朗、土地平曠、屋舎儼然……雞犬相聞、其中往来種作、男女衣著、悉如外人……といつた『桃花源記』の文章そのままである。

村はパ・トンチン Pha Tong Ching の鋭い峯々にとりまかれた海抜九八〇米の盆地の南側に立地している。村の周囲は石灰岩の露出した植生のまばらな斜面、あるいは森林に覆われ、盆地の中央を削つて小川があるが、乾季には水が流れていない。村の家々はカギなりに一列ないし二列に並び、相互に可なり接近して建てられている。それぞれの家近くに米倉・豚小舎・馬屋・雞舎が無秩序に建てられ、それらを包括して屋敷の境界を示す柵はみられない。村の中央に樹叢があり、柵をめぐらしてある。染料用の草・茶樹・桃などの若干の果樹がみられたが、その他は未詳である。[21] 村の北部に茶園、その向うがケシ畑と菜園になつてをり、筆者が一月末に訪問した時には白と紫のケシが満開で



(1) 平面図

(3) 正面図

(2) 側面図

〔注〕

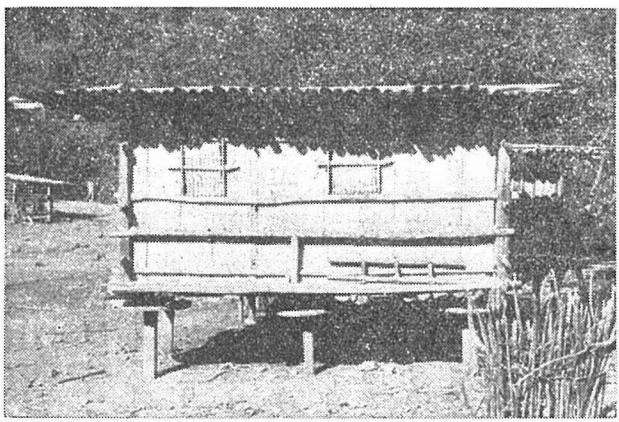
a＝土間
b＝寝　室
c¹＝客用寝室
c²＝客用寝台（これのない家も多い）
d＝祭　壇
e＝カマド
f＝イロリ
g＝豚小屋
h＝竹樋（堀井戸へ導水する）

第3図　ヤオ族の家屋（趙龍清の家を示す）

あつた。もつともケシ畑と菜園とは劃然と区分されているわけではなく、ケシに交つてトーモロコシ・トウガラシ・キャベツなどが混栽されている。村の西部は一帯に灌木林になつているが、その一部が切開かれてコーヒー畑になつていた。これは最近、ラオ人を通じてボロヴェン Boloven 高原から将来されたものであるが、成育状況は思わしくないという。村の南部には深い樹林がひろがり、尾根筋から山頂をおおつている。ヤオ村落はあたかも砂漠のなかのオアシスのごとく、高峻な山地にあつて、そこからそれ自身完結したひとつの世界を区切りとつているごとくである。それは確かに〈隠れ里〉に似ている。

カイソー村を構成する家々はそのサイズにおいて極めて区々である。そこには 11, 22, 23, 25, 26, 27 のごとき極めて小さい、一見して米倉か物置きと誤認する程の家と、残余の可なり大きい立派な家とに二大別される。これは村落社会における何等かの社会階層の存在を示唆するものと思われるが未調査である。一般に彼等の家の特徴として、木造、土間式ですべて切妻々入であるが、屋根はカヤ葺きと木羽葺きとがあり、なかに二、三軒は片側のみ波形トタ

ン（日本製）を用いている。屋根の傾斜は急で、雨水は竹樋によつて傍の溜井戸に導かれている。ただし乾季には井戸水は利用し得ない。室内は広い土間を中心に、その一側に寝室がならび、他側に客用の寝室と猪舎が並ぶ。土間にはイロリとカマドがしつらへられ、[29] 一方の側に祭壇がある。祭壇の傍に「直上清風生羽翼」といつた文字を書いた紅紙の聯が数葉貼つてあることもある。また入口上方の妻板に例えば「乙未年仲冬之月望参日建築」などと達筆に墨書されている家もある。ところで、家々はすべて斜面に建てられているから、その一部は自ら杭上に建てられることになるが、一般に客の寝室と猪舎の部分がそれにあてられている。また、家に付属して馬屋・雞舎があり、米倉があるが、米倉は必ず高床式で床下の柱にまるい鼠返しのついている点が注目された。猪舎が別棟の場合もある。



2. ヤオ族の穀物倉（カイソー村）

これらヤオ村落の歴史に関しては未調査であるが、カイソー村は乙酉年の開村で十四年、パ・ナム・ピン村は二十年、パ・ルアン村はすでに五十年以上の歴史を持つということであつた。

(2) 生業と生活　筆者はヤオ村落がそれ自身完結した生活体としての印象をあたえると述べたが、他方、彼等の今日の生活はひろく周辺山地の資源を利用することによつて成立している。彼等の生活空間は必ずしも狭く局限されてはいない。これを土地利用に関して村内部から外部にむかつて記述すると次のごとくになる。すなわち　(1)　先ず村域内においては茶桃・コーヒーなどのほか若干の作物が栽培され、馬 *ma*, 牛 *ngon*, 豚 *tung*, 雞 *chaj*, 犬 *chu* が飼育されている（イタリックで示したものはヤオ語、以上同様）。水牛 *sugon*, 猫 *lom*, 鵞 *ap* はカイソー村には

いないが、パ・コーム村にはいる。(2) この外側がケシ畑と菜園であり、(3) 村を遠く離れて焼畑が開かれケシ・陸稲・サトウキビ・トーモロコシ・サツマイモ・バナナなどが栽培されている。徒歩二、三時間の尾根とその斜面に開かれた焼畑——陸稲畑である由——をみたが、そこには二戸・三戸・五戸と三群の出小屋が望見された。(4) もちろん森林・竹林は用材にまた紙(竹帛)の原料として利用されてをり、ヤオ族のみの知つている——ラオ族は知らない——銀・鉛鉱もある。[24] (5) 最近では村人口の増加に対応してカイソー村の焼畑がデン・ディン峠近傍にまで進出してきたが——開墾中で出小屋は未だない——こうなると彼等を一概に山地居住民と呼ぶことが出来ないかもしれない。平地進出に関してヤオ族は可なり意欲的であつた。ちなみにデン・ディン峠は標高六七五米である。

さて、ヤオ族の栽培作物のうち最も重要なものはケシ・陸稲・トーモロコシであるが、そのうちケシ *in*(種畑)は年三回——七月播種〜九月収穫、同八月〜十二月、九月〜一、二月——栽培され、種子から乳液を集めアヘンを粗製する。これが彼等の主要な現金収入源であり、生活の主たるよりどころでもある。陸稲品種には数種あるが筆者の入手したものは次の三品種である。1、*byo-bun-tsi*(稲糯赤米)、これは三、四月に播種し九月に収穫する。2、*byo-mau*(稲糯黒米)、同じく三月種〜九月収、3、*byo-tsi-pe*(稲粳米白)、同じく三月種〜九月収。一見して糯米が主食のごとくであるが、実は粳米を常食している。トーモロコシ *me*:(種合)の品種は筆者には不明であつたが、これは多く家畜の飼料にあてられていた。馬は運搬用の小馬で数頭、牛は果して何に使うか、谷筋のラオ部落では牛をヤオ族・苗族の村から購入する由であつたが、他の用途は知らない。動物蛋白源として魚類を利用し得ない彼等にとつて鳥獣肉以外には豚・雞が最も重要であり、畜産の重点もここに置かれている。

次に彼等の食生活について筆者の観察を述べておこう。先ず食習慣および食事作法についてみると、1、食事時間と回数については文明国のように一日三回、朝昼晩に食事するわけではなく、いわゆる朝食が十一時頃であつたり、夜食をつづけざまに二度、三度とつたりする。一般に二食が原則で空腹になつた時にサツマイモやバナナを焼き、あ

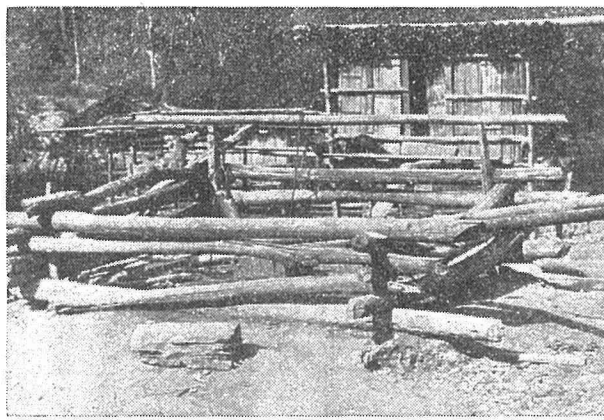
るいはサトウキビをかじる様であつた。この点はラオ族の村もほぼ同様である。2、食事は普通まるい小卓をかこみ円座――ラオ族からの借用か。ラオ語でターン Tan という――に坐して、あるいはイロリをかこんでとる。その際、決して男女同席しない。家族人数の多いところでは先ず戸主と年長の男子がとり、次に残余の男子・最後に女子がカマド際で食べる。食事においても性別、年齢別の差別は極めて厳重である。3、ヤオ文化一般の特徴として食事も常に儀礼的・宗教的雰囲気につつまれている。日常の食事に際しても先づ戸主が坐して唱え言をつぶやき、その後はじめて食物をたべるが、会食・宴会となるとこの手続きは一層複雑になる。最初に村長ないしその席の――客側の――最長老が低声にながながと唱え言をいい、次に主人が立つて一人一人の客に酒盃をわたす。客はこれを受けてから主人に返す。一巡して今度は逆に客の一人一人が酒盃を主人におくる。終つて一同揃つて酒盃をあげ、食事に入る。ただし食事の終りには特別の儀礼はない。4、宴会は土間に細長い卓を置き、その上をバナナの葉で覆い食卓とするが、参会者が多く一度に着席し得なければ二回、三回にわけ年長者グループ→その他の男子→主催者側男子（結婚式の場合には新夫婦双方の父）が食事し、その後女たちが別室（カマド際）でたべる。5、一方、女性たちの仕事の分担も明瞭で炊事係・給仕係（若い未婚女性）・監督（老女）とわかれ、若い女性は屢々老女に叱責される。

食物についてみると主食は粳米で、これを炊き茶碗に盛り箸でたべる。しかし宴会その他の機会には糯米も用い、赤米の糯を蒸し、バナナの葉に盛つて出すことがある。また調理方法は不明であるが糯米を蒸して醗酵せしめたごとき、あるいは飯に甘酒をかけたごときものもあり好んで食べている。次に副食物には豚の脂肉と筍のスープ――食事の進行につれてこの中へ煮た野菜を入れる――、豚ひき肉の煮つけ、茹でた雞の足、雞の手羽――この二つが彼等にとつて最上の珍味であり、筆者も屢々すすめられて食べた――、土のついたままの生キャベツ、豚焼肉、その他であり、兎に角、あらゆるものに豚の脂臭が染みて耐え難いものである。酒は米から造り、赤白二種がある。強く、特有の匂いを持つていた。また、ヤオの老人のなかにはひそかにサッカリンを所持し、酒盃に入れて飲むものがあつた。

彼はこれを「砂糖」といつていた。食事がすすむと洗面器に容れ、スプーンをそえた豚の血漿——凝固したプリン状の——が廻されるが、これに刻んだネギを入れたものもあり、美味であつたが、同行のラオ人はこれを敬遠していた。ヤオ族の好物かつ精力剤であるらしい。

嗜好品に茶 *Cha* と阿片があり、茶は数葉を火にかざして焙じ、熱湯に入れて使用する。阿片は壮・老年男子が嗜み、青少年は決して口にしない。煙草も同様で、これらの使用には厳格な年齢的制約があるようである。一方、老人は午後、とくに食後は必ず阿片を吸飲し、そのため青く翳のある顔が多く、村長のごときはほとんど一日中毛布にくるまつて寝ている有様であつた。阿片中毒でもあろうか。ところでヤオは好奇心が強く、ラオ村落からネスカフェーと練乳を求めてをり——富裕者のみであるが——好んでコーヒを飲む。

最後に服装について一言しよう。ヤオ族は何よりも制服〈愛用者〉であつて、常に、日常労働にも祭礼その他にも同一の服装を改めることがない。男は頭に帽 *to-pao* をかぶり、衣 *lui* と褲 *hŏu* をつける。布地は何れも粗製の黒木綿——大てい日本製——で、帽子は中央に赤い毛糸のつまみと縁に赤い木綿を編んで飾りにする。衣にも同様な飾りが襟と袖につけられてをり、銀鈕が並ぶ。褲の裾にも飾りがある。一般に下着はつけないし、靴は穿かない。女の服装は先ず頭に赤い小布 *hon zun* を置いてから頭抱 *ngon-peu* を巻く。頭抱は帯と同様の布であるが刺繍の花模様が若干小さい。耳に一対の銀の耳環 *nom-hu : n* をさげ、首に一つ以上の項圏 *cha-wa : n* をつける。これも銀製である。衣 *lui* は腰のあたりで三片にわかれ一種のスカートになつている。



3. 溜井戸（カイソー村）

襟には赤い毛布の房飾りがつき、矩形の銀板 *lui-kwa:n* を合わせて止める。褲 *hou* には一面の花 *tsòn* の刺繍がある。衣・褲の上を腰帯 *lu-sin* で巻き一端を挟んで止める。これが〈制服〉であるが、特に着飾つた時には背中にソン・プイ *'son-pui* という一種の打掛けをかける。これこそまさに燦然と輝く美々しいものである。女は肌着は着ず、水浴もしない。従つて体臭紛々である。以上、ヤオ族男女の衣服はすべて購入の上、民族博物館に所蔵されているので詳説を避ける。[21]

(3) 教養と生活　初めてヤオ族の村を訪ね、ヤオとその文化に接した時の印象には一種異様なものがあつた。ラオの村ではかつて一度も感じたことのない或種の無気味さ、或種の圧迫感を感じた。黒服を身にまとつた阿片常用者の青黄色い顔、落窪んで鋭い眼、調査者がかえつて彼等に調査され注視されていて、次にはどういう状況が展開するのか全く予測がつかない。軽い不安を感じた。ここに幾つかの問題を見出すことが出来ると思う。

1、ヤオ族の生活のなかにはきびしい社会的訓練が行きわたつている。それは山地居住における生活のきびしさを克服するために創出された集団生活の秩序であろうが、このことは食事・会食などの際にみられる性別・年齢別秩序、座順などから明瞭に――ルーズともみえるラオ族のそれと比較すれば一層あざやかに――看取しうることである。また、阿片にしろタバコにしろこれを吸飲し得るものに一定の制限があること、村民・家長と家族員の間にみられる権威と服従の関係など、単に自然発生的でない訓練、〈しつけ〉の存在を思わしめるものである。2、後述のごときヤオ族の文化における高度に儀礼的な性格、3、前記、訓練の問題と関聯して彼等の教養について考えねばならない。つまり広義の社会的訓練のほかに、狭義の教育・教養の制度が形成されようとしていることである。このことは特に漢字・漢文の教養と結びついてシナ文化の色彩が著しく看取される。ヤオ族が漢字を解することについてはすでにラオの村人から聞き知つていたが、彼等の村を訪ねて始めてその実態を知ることが出来た。家屋の妻板に記された建築年代、祭壇の傍に貼られた聯に関してはすでに述べたが、筆者の宿泊した家の板壁には次のような一節が掲げられていた。

「我国地方広大人口衆多、全国原有二十八省、抗戦勝利以

後把東北改為九省、又従日本手中収回台湾省便為成三十五省……」。またこの家には上海出版の辞書があり、一種の公民教科書があつて彼等はそれを日常利用している。確認してはいないが阿片売買の記録は一種の大福帳に毛筆で記入しているらしい。紙は彼等自製の竹帛である。単に記録だけでなく一種の詩をつくる。「冬間は竹帛を造つて以て業となし」云々といつた類で、これを十五、六のヤオが筆者の目前に書くのであるから全く驚かざるを得なかつた。次にヤオの歌若干をしめす。（何れも原文のまゝ）

1、有元千里来相会　無元対面不相逢
2、有元逢作親兄弟　同如天賜浅寒丹（苗）
3、当切翁爺有好地　世今分散各山遊
4、可惜当初不昭定　正来発出上山遊

これらはあるいは歌謡として彼等に伝統的な知識であると思われるかも知れない。しかし彼等は現実に漢字によつて用を弁ずることが出来る。以下は筆者に日本から香炉を持参して欲しい旨の依頼である。「貴官員、請爾労煩千急拿来給我小民、香炉・水碗、請労拿代来給我十対、価銭多少不説」。もつとも彼等の地理像では日本は――辞書で読んでいるのだが――ヴィエンチャンの隣りに位置しているのだから事は厄介である。

さて、このような漢字・漢文の教養を彼等はいかにして身につけるのだろうか。それはホー人の先生が教えるのである。ホー Ho:（ラオ族もホー人 Khon Ho: と呼び大平天国の乱にのがれてきた人々の子孫だという）は客家族――ヤオは客家中人とも書く――であり、その若干名がそれぞれのヤオ部落に住み込み――ホー人にはヤオ語を解するものと、解しないものとがあるという。後者の場合にはラオ語を解するのであろう――一定期間謝礼を受けて青年を教育するのだという。ルアンプラバン近郊のパ・コーム村には可なり多数のホー人が雑居し、年額一、一〇〇キップ[25]の謝礼をとつて中国語を教授するという。カイソー村にも最近まで――五年前死亡――雲南から移住したホー人が一人いて同じく青年を指導した由、この人は姓を高、名を金才といつたという。ただしこのホー人はすべてのヤオ部落に入込んでいるわけではなく、パ・ルアン、パ・ナム・ピン両部落には現在はいない。従つてこれら部落の青年は漢字を解する程度が低い。また、一般に女性は漢字を知らない。4、系統的

な教養を身につけるためには余暇がなければならない。余暇、ことに青年期に勉学の余暇を生み出すごとき種族生活の秩序化はいかにして達成されたものであろうか。この点からみてもヤオ族は、少数民族ではあつても未開民族ではない。5、ヤオ族が――苗族もそうだが――他種族に比して著しく好奇心に富むことは誰知らぬものもない。好奇心は環境に対し、また他文化に対する能動的な態度・振舞いということであろうが、その裏には彼等の文化的伝統の高さを考うべきであろうか。何となれば、理解と共感とは二つの文化の間の〈対応〉を示すに他ならないからである。さて、ラオの村へ来たヤオは村中を隅から隅まで歩きまわり、寺をのぞき、大工作業に注目し、商店の品物を一々手にとつて眺める。小川の魚に、豚・雞の飼育法に、コーヒー園の状況に注意し、果ては筆者の鞄を開けて一々検査しはじめる。――プ・テン族は決してこういうことをしない――一方、ヤオの村カイソーには二、三戸ではあるがラジオ（もちろん電池式）を持つている家があり、自転車を持つ家が一戸ある。もちろん自転車の用途はないので埃をかぶつたままであるが、石油ランプを持つ家もあり、ラオ族に倣つて屋根の一部をトタン葺きにすることが流行している。サッカリンを使い、コーヒーを飲むだけでなく、進んでコーヒーを栽培し、ココ椰子・檳榔の移植を試みたが、これには失敗した。しかし彼等の未来への意欲はつよく、谷筋に近く焼畑を開き、出来るならばそこに拠点をつくり自動車を購入して都市（ヴィエンチャン）との連絡を自らつけようと企てている。従来、阿片売買をはじめ必需品の購入に際してラオ人の仲買人に中間搾取されていたから、何とかしてその重圧を取除けたいというわけである。もつ

4. ヤオ族の民家（カイソー村）

ともヤオ自身が云うように「自動車を買う金はあるが、まだそこまでは踏切れない」のである。ヤオ族はたしかに将来への企画性に長じている。6、ヤオ族の文化は外界との自由な交渉に欠けたものであり、いわば〈閉じられた文化〉である。そこでは種族文化の機能的構築にも増して文化諸部分の形態が重視されている。もちろん、すべての〈文化〉は function と form との相互交渉の上に成立し、運転してゆくものには違いないがここでは特に著しく form に重点が置かれているように思われる。一見してそれが奇形的に一種の〈妖怪〉として映るのはそのためであろう。

(4) 家族と村落　北部ラオスのヤオ族に十二種族（十二姓）あるといわれるが、カイソー村は――パ・ルアン村、パ・ナム・ピン村も同様――その中の白倫 Yao Khǎw に属する。村は二七家族よりなり、それぞれの戸主名・家族員数（カッコ内）は次のごとくである。

1	趙文龍(18)	2	趙龍盛(8)	12	趙龍鄉(5)	13	李龍聰(7)	14	趙龍思(7)
3	趙進陞、趙龍清(10)	4	趙龍奐、趙龍堂(13)	5	趙進卯(8)	15	鄧富陞(9)	16	鄧文思(5)	17	趙文坤(14)	18	趙文鄉(6)	19	趙文陞(10)	20	鄧貴珠(7)
6	鄧貴安(11)	7	鄧貴富(5)	8	鄧金昌(6)	21	趙文寿(6)	22	趙文聰(5)	23	鄧貴聰(6)
9	鄧貴堂(6)	10	鄧金陞(10)	11	鄧金富(3)	24	趙文堂(13)	25	趙進寿(4)	26	鄧財清(3)
						27	趙龍福(4)				

もちろんヤオは Chao (Chiu) Buan Luan, Chao Lon Sin, Tan Kue Pou…… と発音してをり、なかにヤオ風の読み方があるかも知れないがここには省略する。また一戸に二名連記したものは二夫婦同居の意であるが、果して厳密に他と区別し得るか否かは不明であるので、以下、便宜上それぞれ一家族として取扱う。1、カイソー村は全二七戸、計二〇九人よりなり、一戸平均七・七四人である。もちろんこの中には家族員三、四人の小家族から、十人以上、十八人という大家族（家族員数の上で）までが含まれている。2、戸主名のうち2、3、5は正しくは趙龍盛坤、趙進陞陞、趙進卯明といい、これらの坤、明はそれぞれ父の名をとつたものである。もちろんこれはこの三名以外にも見られる筈であるが未調査である。3、より詳細な家族構成に関して

第　1　表

家族番号	F 1	F 2	F 3	F 8	F17
戸主の出生地	カイソー	パ・ルアン	カイソー	パ・ナム・ピン	カイソー
妻の出生地	パ・ルアン	パ・ルアン	パ・ルアン	パ・ルアン	1. パ・デン 2. パ・ルアン

戸主とその妻の出生地　（F17の妻1は死亡）

も調査を企てたが甚だしく困難であり、僅か五家族（内一家族は部分的にのみ）について若干知り得たのみであつた。すなわち家族1、2、3、8、17である。この六家族のみを資料としてヤオ族一般を考えることは危険であるが、一応次の事実を推測しうるであろう。すなわち年令の記憶は自己および身近の数人を除いてすべて干支によつている。もちろん干支を年数化し得るけれども一般にはその必要を感じていない。次にこの五家族に関する限り家族は系譜的で、少くも三世代を含み、さらにその内に二ないし三夫婦を含んでいる。同居家族の多いことは山地居住の一特質であろうか。夫婦はカイソー村に関しては――二七家族とも――単婚形態をとつているが、パ・コーム村のヤオ村のヤオには一夫多妻があり、村長は三人の妻を持ち、外にも同様の例が若干あるという。次に婚姻について、戸主とその妻の出生地をみると（第1表）、その中に夫婦とも他部落出身者のあることが注意される（五例中二例）。これは多少とも彼等の伝統的移動生活の名残り、すなわち村は一時的・寄合い世帯的であつて種族統合の原理が単に個々の村を集成したところに求められないということであろうか。村という地域原理とともに、同族の血縁原理がなお強く作用しているのではなかろうか。従つて隔絶した山地居住の制約をこえて彼等の通婚はひろく拡大してをり（第2表）、いわゆる村内婚の比重は小さい。婚姻はすべて嫁入婚であるが、花聟の家で結婚式[26]をすますと夫婦そろつて花嫁の家へ戻り、ここで二年間――妻の実家が遠ければ一年――労働し、その後再び夫の家へ戻るという、いわゆる matri-patrilocal residence ないし uxoripatrilocal residence の形をとつている。例へば家族3趙進陞の一家に現在

第　2　表

婚出	村　名	婚入
0	パ・ルアン	7
0	パ・ナム・ピン	1
1	カイソー	0
3	パ・コーム	0
0	パ・デン	3

カイソー村女子の婚出入先

盤国盛という男がいるが、これは進陞の孫娘の夫で二年後に妻を伴つて故郷のパ・コーム村へ帰るものである。最後に注意したいことはヤオ女性における婚前性交渉 premarital sexual relations の自由さであつて、これは附近のラオ人のひとしく認めるところであり、しかもその際には種族の如何を問わないという。この事実と夫婦同齢ないし姉女房が比較的多いということとは関係があろう。ちなみに筆者の実見した結婚式においては花聟一七歳花嫁二五歳であつた。

ところで前記、戸主名一覧から容易に知りうるごとくヤオ家族には同姓が多く、カイソー村は趙・鄧・李三姓のみからなる。すなわち同姓 *ton sinh* (*ton fi:nh*) である。しかし同姓必ずしも祖先を同じくするわけではなく、後者を同祖先あるいは供祖先 *Chuan tsaou* として区別している。カイソー村では家族1・17・18・19・21・22・24の組、同じく2・3・4・5・12・14・25・27の組、6・7・8・9・10・11・15・16・20・23・26の組、それに唯一戸の13の四組の *Chuan tsaou* がある。*chuan tsaou* はいわば同族 lineage であつて、この中での通婚は許されない。すなわち同姓要得、供祖先不得である。ただし第一組について1・17・19・21は *chuan tsaou* であるが、18・22・24は一戸ずつそれぞれ別組に属するというものもある。同祖先 *chuan tsaou* を彼等はラオ語でスア・ディオ・カン Sua diaw Kan

第 3 表

FaFa	on
MoFa	ontah
FaMo	kou
MoMo	matia
Fa	tia
Mo	ma:
FaBr (e)	pe
FaBr (y)	iyou-tia
MoBr (e)	tom-nau
MoBr (y)	un-nau, nau
FaSi (e)	pechua
FaSi (y)	moua-ma
Mosi (e)	untui
MoSi (y)	unzia
Br (e)	ko:
Br (y)	iyo:
Si (e)	to: n
Si (y)	mo: a
FaBrSo	funton (pfunton)
FaSiSo	〃 〃
MaBrSo	〃 〃
MaSiSo	〃 〃
FaBrDa	funsi: a (pfunsi: a)
FaSiDa	〃 〃
MoBrDa	〃 〃
MoSiDa	〃 〃
So	ton
Da	si: a
Child	to: n
SoSo	funton (pfunton)
DaSo	〃 〃
SoDa	funsi: a (pfunsi: a)
DaDa	〃 〃
gr Child	fun (pfun)
sibling	ko-iyou

ヤオ族の親族名称

といつているが両者の正確な対応については未調査である。[27]

なおヤオ族の親族名称は第3表の通りである。ここでは一応それが父方母方、直系を区別する bifurcate collateral 型に属し、イトコ名称に関しては交叉イトコ・平行イトコの区別のないいわゆる Eskimo 型に属することを述べるに止め、解説は別の機会を得たい。

(5) 宗教の一特質 ヤオ族の宗教一般について知ることは出来なかつたが、たまたま第二回調査の際に彼等の祭を観察することが出来たので報告する。それは二月十四日、ヤオ暦では十二月二十八日に当つていた。祖先祭 *Pu-tou:n* が営まれ、来るべき新年の吉凶が占われたのである。ラオ人はこの祭をラオ語でブン・ピー・マイ Bun Phi Mai（新年祭）と呼んでいた。ヤオによる新年祭 *Sian Hyan Sio Penh* は正月元日に行うとのこと。そうするとラオ人の称呼は誤りで祖先祭が正しいといわねばならない。たしかにこの祭 *Tsa:* は全村落の祭ではなく、趙一族の一部——これが前記、同祖先グループ第二組のさらに一部分にあたる——の祭であつた。以下、幾分記述的になるが祭の様相を伝えたい。

二月十四日午後三時頃、筆者はカイソー村へ着いたばかりで趙（チャオ）龍清（ロンシン）の家にいた。突然、村中央あたりからドドドン ドドドンという太鼓のひびきが聞えてきた。ヤオ青年にさそわれてその家へ行つてみると、すでに多くのヤオが土間（ニワ）に集つていた。中へ入ると右手の小部屋に趙龍思（チャオロンフエイ）がいて筆者を呼んだ。ここは彼の家、彼は六十歳ちかい老人である。ごろりと横になり毛布をかぶつて阿片を吸つているところであつた。筆者はその傍に坐つた。太鼓 *Zou* の音、二種のカネ *Man, Chao Tsoui* の音が高まり（ニワの一隅でたたいている）ヤオが続々つめかけてきた。約二間四方のニワが清掃され、祭壇 Mien Tia Lon に香がたかれ、ローソクの灯がともされた。祭壇は祖先を祀つたものというが、粗末な木製、紙貼りで、日・月・星の模様が象どられていた。祭壇の左横手の机には供物として一頭の豚（殺して皮をはいだもの）が横たえられ、その前に酒盃、うしろに紙（白）の三角旗が十数本たてかけられていた。同じく祭壇の右手前に木製の床机が置かれていた。しばらくは何事も起らなかつた。そこへ入口（正面ではなく側面の入口）を押し開け、人々を突き除けるようにして一人のヤオが転がり込んできた。無帽で髪を短く刈り、後頭部の髪だけを肩に垂らしいた。彼はすでに入神錯乱の状態で暴れまわつたが、やがてその場のヤオたちに取抑えられて祭壇の前に立ち、

低声に何事か唱えはじめた。時々、パッパッと何かを撒きちらす。塩であつた。今度は祭壇の下から長さ十糎ほどの丁度筍を縦に二つ割りしたようなもの(竹製、告 *chao* という)を取出し、右手に握つて身体をやや前かがみにしたと思うとパッとニワに落した。彼は告(チャオ)のはじけ具合を見守つている。二回、三回してからその男は祭壇を背にこちらを向いて佇ち首を垂れた。顔色蒼白、疲労困憊といつた息づかいである。突然、筆者の横に寝ていた龍思(ロンフユイ)が起き上り、人々をかきわけて床机に腰かけた。と、彼は左右の足を交互に震わせはじめた。二十秒あるいは三十秒、長髪を振乱した彼はつと立上ると祭壇の前に立ち唱え言をはじめた。パッパッと今度は白米を投げ上げる。次にニワをめぐつて舞いはじめた。腰をややかがめ、右手、左足を前に延ばし、左手で頭を抱え、トントントンと廻る。一、二、三回とまわり再び祭壇の前に立つた。チャオを取上げ、いかにも老人らしい物馴れた態度でハラリと落す。チャオの二片は或時は離れ或時は重なる。終つて彼は第一の男の傍に立つて頭を垂れ、長髪を左手でつまぐつていた。しばらくは沈黙。人々に交つていた一人のヤオが帽を投げ棄て、床机に腰かけると直ちに足を震わせはじめた。入神するとパッと躍り出し、途端にニワに倒れて身悶えする。二、三人のヤオが扶け起し、しばらくもみ合つた末、祭壇におしやつた。このようにして計七人、祭壇の前にこちら向きに立つた。何れも髪も奇妙に刈り込んでいる。中央を刈つて周辺を残したもの、片側のみ刈取つたもの、あるいは甚しい長髪のもの、実に奇怪であつた。今度は七人そろつて輪舞、トントントンと飛ぶように廻り、ハッハッと気合をかけると反対に廻る。これを二、三度繰返して次に祭壇に飾つた旗を持つて踊る。一人二本、二本の旗を頭上にかざし、肩にかかげ、或いは左足の足指に一本の旗を挟んで踊る。数回の輪舞ののち旗をニワの中央に挿し、七人集つてチャオを試みた。太鼓とカネの音は相変らずはげしい。この間に他の男が大皿に盛つた白米をニワの中央にすえ、そのまわりに旗を挿し替え、さらにその外側に盃を並べて酒を注いだ。そこへ生きた雞が運び込まれた。一人一羽、ただし龍思のみ三羽。今度は雞を頭上にかかげて輪舞、雞の悲鳴と羽ばたきがすさまじい。しかし七人は終始無言のまま二回、三回と輪舞をつづける。急に舞の輪をちぢめて中央にかがみ雞の首を締める。そこへ傍の青年四、五人が出て腰の山刀を抜いて雞の脛動脈を断つた。滴る血潮が白米と旗に注がれた。七人は血のしたたる雞を頭上に掲げて舞い、そのままかがみ込んだと思うと雞を後に投げ棄てた。そこへ再び生雞が届けられ、同じことが繰返された。もう一度、今度は立派な雄雞が一羽、龍思(ロンフユイ)に手渡された。龍思(ロンフユイ)はしばらくこの雞に見入つていた。特に鋭い喙、足の爪に注目していた。やがて彼はこの雞

をかざして舞う。雞は羽ばたき、彼の長髪は乱れ、龍思（チンフロイ）はもはやこの世の人とも思われない。雞の血が再び白米と旗を色どり、酒盃も赤く染まつた。これがすむと七人は祭壇の前で最後のチャオを試みた。二回、三回、龍思の手からチャオがすべるように落ちすべての人々がチャオのはじけ方に注目する。もちろん、吉か凶か筆者にはわからない。龍思（ロンフロイ）も顔色ひとつ変えない。終つて七人は祭壇を背にして列び、頭を垂れた。太鼓とカネの音もたえ、群衆がそれぞれ帰つてゆく。祭が終つたのである。七人は再び蘇つて生気をとりもどし始めた。――この夜、三軒の家で宴会があり、村長をはじめとしてそれぞれ三、四十人のヤオが集つた。最初は趙龍思（チャオロンフロイ）の家、次に趙龍奐（チャオロンヒン）の家、最後が趙進卯（チャオツンイエン）の家であつた。会衆は一回ごとに入替るのではなく、三回通じて出席するのである。食物と宴会次第は前述したと同様であつた。また、女性は男たちの会食が終つてからそれぞれ食事に出かけていつた。

ヤオ族の宗教は一般に祖先崇拝だといわれる。しかし、それは以上のごとくにシャーマニズムと結びついたものであつた。すなわち　1、最初に祭場にころがり込んできた男、彼がこの村のシャーマンであり、「哄家人」といわれている。彼は鄧財清である。ラオ人は彼をモーモー　MóMó（ラオ語、呪師）と称している。　2、祭壇に祀られているものは祖先の霊位――ヤオは法位ともいう――であるが、別に例えば村長のところには「大坛三清大道神金依」が祀られている。3、すべてのヤオは青年時代から容易にエクスタシーに入るための修練を積む。4、生雞をかざし、その飛翔の様を模するごとき舞踊。5、太鼓の使用など何れもこれを証するものである。しかし、この祭には他の要素の混入もみられ可なり複合的な性格を持つものというべきであろう。なおカイソー村のヤオはこの祭を外来者に見せることを好まず、特に呪師について語りたがらない。筆者の友人、鄧金昌（タンキンシャン）もノートに哄家人と書いてくれたが、すぐ消してしまつた。[28]

ヤオ族の村にはラオ族のそれのごとき村社――ラオ語のホー・ピー　Ho：Phi（ピーすなわち精霊の家）――はない。[29]

(6)　ヤオ語の所属はなお未決定のようである。最近、Benedictはこれを原オーストリック語に属せしめたが、これによるとヤオ語はシナ・チベット語族よりむしろタイ語、モンクメール語などに近縁ということになる。何れにしろ筆者は門外漢であるが、参考までに次に若干の語彙を示す

ことにする（第4表）。それにしてもヤオ語の声調はきわめて複雑であるため弁別困難であつたし、表記法も不完全である。比較の端緒にもなれば幸である。

三　地域文化の構造

以上、ヤオ文化の概要について報告したが、筆者の意図は単に漢民族文化によつて圧迫、駆逐された文化の残存形態を記述しようとしたのではない。そうではなくて追われ追われた末にたどり着いたラオス北部において、ヤオ族がいかに其地の地域文化のなかに組込まれていつたか。いかに地域文化の形成に貢献したか。あるいはそのなかで周辺諸種族との間にいかなる文化的相互関係を樹立しているか。要するに北部ラオスにおける地域文化の実態、その構造を明らかにしようとするにある。

(1)　ヤオ族の分布についてはすでに述べたが、分布は決して単なる〈拡がり〉〈ちらばり方〉ではなく、それは種

ヤオ語の語彙

Yao	English	Yao
ko : n	long	da : o
tswan	short	nan
chu :	new	si-an
tou-ei	old	khaw
bya : o	sit	tso-ei
no :	stand	sou
chao	lie	ba : p
da : t	sleep	n-njo : m
o :	die	ta : e
o : chum	drink	hop
tam	eat	njan
u-am	hear	hae
ke :m	see	pu-at
da-o	walk	pou
lu-pieh	come	ta : e
sa-tsioh	swim	tsi-ou
tao	fly	da : e
bon-houe	bite	ziu
h-la :	kill	ta-eh
fi : n	burn	pu : a
lu-muan	give	pu : n
mao	know	hiw
tsu-byu : n	that	bu : a
tau	this	na : e
tou-sio	what	na-nju : n
sa : e	who	pa-tao
i : a	not	mae
aw-boua	say	wa :
moe	round	chun
n-chan-to : n	full	pou-an
si : a-to : n	knee	tsen-bo :
mien	claw	gim
boua	horn	cho : n
ho :	breast	la-khod
faj	river	uan-mi : n
cho : m		
chu-on		
ga : e		
do : n		
suan		
tcho :		

第　4　表

English	Yao	English
eye	n-tsi : n	root
nose	b-tso : n	seed
ear	n-no : m	dog
mouth	zu : i	tail
tongue	vien	fish
tooth	n-ja :	bird
hair	bo-pie	egg
head	n-gon	feather
neck	cha : n	meat
hand	ba-tsa : n	grease
skin	dop	louse
foot	zao-pen	water
belly	si : a	mountain
bone	bu : n	earth
heart	hiyo :	stone
liver	k-fa : n, t-fa : n	sand
blood	i-za : m	road
one	i : e	sun
two	i :	moon
three	poua	star
four	pie :	night
five	pyah :	cloud
six	tshu :	rain
seven	si : a	fire
eight	hien	smoke
nine	doua	ashes
ten	tsiem	I
eleven	tsie-ien	we
twelve	tsiem-ni :	thou
twenty	ni : tsiem	man
thirty	fa : t-tsiem	woman
many	tsam	person
all	zoi-tsun	name
red	bou-a	big
black	ki : a	small
green	me : n	warm
yellow	iya : n	cold
white	pe :	dry
tree	dy-an	wet
bark	dom	good
leaf	no : m	bad

族相互関係の空間的表現である。北部ラオスには多数の少数民族が割拠しているが、それはラオ族を中心に互に複雑な利害関係の絆によつて緊密に結び合わされている。彼等少数民族の村落が地理的に他と隔離し、孤立的な生活を営んでいることは一つの事実である。しかしその反面、彼等が互に密接な相互交渉のうちにあるということもまた一つの事実である。例えばラオス北辺の町ナム・ター Nam Tha ではラオ族の経営する市場を中心に黒タイ Thai Dam 族・メオ(苗)族・ヤオ族・リュー Lu 族・カムー Kha Mou 族・カコー Kha Kho 族・ランテン Lanten 族・およびヴェトナム人・パキスタン人・華商・フランス人・アメリカ人などが出入し、常時、相互的な交渉をたもつている。一方、パ・タン村附近では、同村を中心にカムー族・ヤオ族・メオ族が同じく接触し交渉している。そこにはパ・タン村を中心に多数の異種族村落を包含する商圏が構成されているのである。[20]

要するに種族分布は単に歴史的な種族移動史の現状を示す

ものでもなく、また環境にたいする生態学的適応の単なる結果でもないであろう。それは、文化の地域的体制のなかにおけるそれぞれの種族の位置づけとして理解さるべきものであろう。

(2) 筆者は諸種族間におけるいわば〈文化の算術〉を試みたいと思つた。それは換言すれば文化諸要素の貸借一覧表を作製することでもあるが、調査時日に余裕がなく力及ばなかつた。しかし思い出に任せて記してもラオ族の村にはプテン族の作つた蓆があり、ヤオ族の背負い籠 Pe, Njon Pe Khaw プテン族の籠、Kon To と称するプ・テン族の雨衣、ヤオ族の子供用帽子などが屢々見られるし、一方、プ・テン族の村では家屋様式における全般的なラオ化現象を別にしても、伝統的な立杵と臼の代りにラオ族の唐臼が用いられ始めているし、メオ族の項圏、ヤオ族の腕輪、ラオ族の織つた布地・スカート・頭布などが広く用いられている。ヤオ族においてはこうした文化的交流は少いが、なおラオ族の座椅子 Ta in が広く用いられ、水汲みの竹筒 Bac Nam はラオ族伝来のもののようである。ラオ族を介して流入するヨーロッパ商品——日本製、香港製のものを含めて——は極めて多様である。もちろん諸種族にわたつて共通する器具も多く、他面、プ・テン族の立杵と臼のように亡びゆく文化要素もみられる。当然とはいいながら諸種族文化は互に交流しているのであり、交流することによつて地域文化はその内容を豊富にし、またそれぞれの種族生活を向上せしめているのである。

(3) この点に関してさらに二、三の現象に注目したい。すなわち種族間コミュニケーションの様相に関して、先ず言語においてはラオ語がヤオ族・メオ族・プテン族を媒介する連絡語の役割を果してをり、これらの種族は何れも極めて流暢にラオ語を話す。逆にラオ族はラオ語以外の言語の知識を欠くが、少数者がプテン語々彙の若干を知つてをり、更に小数のものがヤオ語・メオ語を僅かに解する。ラオ族と周辺諸種族との関係は決して最近のものではなく歴史的なものであるから、それぞれの種族の語彙のうちにラオ語からの借用を発見することが出来る。例へばプテン族の語彙のうち数詞は完全にラオ語で置換されてをり、外に〈古い〉ke, tau, 〈噛む〉kàd, 〈円い〉om, 〈胸〉og などにラオ語を使用し、時には否定詞 bo の使用もみられ

る。この点で同じくプテン族とはいえ北方の種族との間には若干の相違がある。[31] 一方、ヤオ語のうちにも〈死ぬ〉tae, 〈知る〉hiw および否定詞 mae のごときがあつて興味ふかい。勿論、共通起源ということも考へられるであろう。但し、筆者はこの問題に関しては論義の資格を欠いている。

次に結婚を契機とする人の交流についてみると第5表のごとくであり、ヤオ族に関してはカイソー村にプ・テン族を夫とするものが一例みられたのみで全般に甚しく種族内婚的である。しかしラオ族とプテン族、ラオ族とメオ族など何れも建前として通婚はしない筈であるにも拘らず、実情は表の如く可なりの人的交流があつて驚かされる。異種族間の物的交流が人的交流を促すのか、あるいはその逆であるのか、にわかに断定し得ないが、交流の事実そのものは動かし難い。

夫の種族	妻の種族	事　　例
Lao	Meo	Muong Kassi に1例, Vientiane に多し
Meo	Lao	Muong Luong, Xieng Khouang に多し。Vientiane に若干。
Lao	Yao	な し
Yao	Lao	な し
Lao	Phou Theng	Muong Kassiに多し, Pha Tang 村に1例
Phou Theng	Lao	Muong Kassiに多し,
Yao	Meo	な し
Meo	Yao	な し
Meo	Phou Theng	な し
Phou Theng	Meo	な し
Yao	Phou Theng	な し
Phou Theng	Yao	Kaisou 村に1例
Frenchman	Lao	多 数
Lao	Frenchwoman	多 数
Vietnamian	Lao	多 数 Pha Tang 村に1例
Lao	Vietnamian	多 数
chinese	Lao	PhaTang 村に1例 (都市に関して未詳).

第5表　異種族間の通婚

ところで以上のごとき種族間の物的・人的、ないし言語的コミュニケーションは互に何等の障害なしに常に対等の立場で行われているわけではない。それぞれの種族が当の地域文化のなかに占める地位には相違がある。しかもその相違はそれぞれの種族文化の視点に応じて同一ではない。ラオ族の認めている地域文化の

秩序とヤオ族のそれとの間には不同があり、出入がある。しかし、パタン村周辺ではラオ文化が最もドミナントな、強い影響力を持つたものであるから、ラオ的地域文化の秩序が地域の隅々にまで滲透しているとみることも出来る。その場合、最も明瞭な上――下関係はラオ族とプ・テン族のそれで、プテン族はラオ族に対して極めて安価に労力奉仕を行い、従者としての地位に甘んじている。プ・テン族はラオ族からみて賢明ならざる、貧しい、ただし最もよく働く種族なのである。プ・テン族がラオ族の前でいかにも自己抑制的に、むしろおどおどと振舞うことを筆者は傷ましく感じた。次にラオ族とヤオ族との関係は文化的には対等であり、ヤオ族のうちにはラオ文化を低く見ているものもある。しかし、ラオ族にとつてヤオ族は借地人であつて、その限り彼等から何等かの金銭的利益を引出すこと――主として阿片の仲買と商業・行商を通じて――を至極当然と心得ている。〈地代〉さえ払つて貰えばよいので、彼等と政治的・社会的関係を持つことを進んで求めようとはしない。ラオ族にとつてヤオ族はよく働き、富裕な、ラオ族に次いで賢明な種族だと思つている。しかし、ヤオ族のなかには、少くも谷間のラオ村落を訪ねる時にはヤオの服を脱ぎ毛糸のセーターを着込んでラオ社会に加わり、ラオ的社会秩序の一端に場を占めようと努力している者がある。彼等はラオス王の政治的支配を認め、その下に従属することを肯定しながら、他方、半ば観念的なヤオ国王の存在を忘れてはいない。[22] ラオ族――メオ族関係は、少くもパタン附近ではヤオ族とのそれに比して著しく疎縁なものである。村数も少く、かつ遠隔地にあり、経済的にもヤオ族よりも貧しいため彼等の存在はラオ的世界の周縁部に位置づけられている。要するにラオ族を中心とする地域文化のなかにはそれぞれの種族の文化的地位が指定され、割当てられている。従つて種族間の相互交渉は右のごとき地域文化、〈場〉の構造を動的に表現したものに外ならない。

(4) 地域文化は歴史的に、生態学的に著しく複合的なものである。しかし、それは単に複雑々多な諸文化の寄せ集めではなく統一的な、秩序を持つたものである。勿論、秩序は種族の視点に応じて多様に、幾重にも相覆うものである。しかし、その中にドミナントな秩序があり、地域文化の基盤をいわば支持している。従つてそれは、それぞれの

種族文化がそれぞれに単位文化と考えられるように、これもまた一つの単位文化と考えることが出来る。それは文化の地域的単位、ないし〈場〉の単位である。ここで、文化を動かす主体を種族ないし人間集団から〈場〉に転換して考えてみよう。諸種族文化の〈場〉は、それぞれの種族文化を配置し、秩序づけ、交流せしめている。古典地理学の用語を借りれば〈場〉〈地域〉は自らを充塡 erfüllen し、進化せしめる。ヤオ族は北部ラオス、パ・タン村を中心とする地域文化の一隅にあつて、孤立的にして同時に種族的文化交流の一環を担つている。彼等は決して単に大民族文化の縁辺にまぎれこんで来た、おちぶれ果てた未開人ではないであろう。

もちろん、今日の地域文化の秩序がそのままで十全なものだというわけではない。或日、ヤオ族の青年、鄧金昌（タンキンシャン）は筆者のフィールド・ノートに次のごとく記した。

「今日世界可惜多、不得合在々少地方在山中」、また「得他兄来存我的地方千好万好」と。筆者は金昌（キンシャン）の意をくんで右の報告を記した次第である。

① 岩田慶治「北ラオスの谷間にて」（『地理』三の十二、四の一）。これはパ・タン村生活記のごく一部分であるが村の概況を伺うことは出来るかも知れない。

② 岩田「Nam Song, Nam Lik 流域における諸種族の分布と移動」（『民族学研究』二三の一、二）。

③ Kha Mou とは同族の自称、Mou はヒトの義か、Kha はタイ語にて奴隷の意ともいうが恐らくはカー語、未詳。Kha Mou もヒトということ。彼等はこの名称の使用を甚だ好まず、従ってラオスにては一般にブ・テン族 Phou Theng (Phou = ヒト、Theng = 高地）と称する。

④ Halpern, J. M.; Aspects of Village Life and Culture Change in Laos, 1958 には Luang-Prabang Province における Muong 別の種族構成が示されている。

⑤ 竹村卓二「南・西シナ非漢民族に関する中国民族学の貢献—文献要録(1)」（『社会人類学』一九五八、二号）。

⑦ W. Credner; Völkerschichtung und Völkerbewegungen im mittleren Hinterindien. Geografiska Annaler.

⑦ Thai Souei, Thai Neua, Thai Pouan, Thai Poua, Thai Deng, Thai Dai, Thai Nouan, Thai Porong, Thai Et, Thai Soun, Thai O, Thai Sot Bau の十二種族、これを二大別して Phou Thai (Thai Deng) と Thai Lao（その他の十一種族）にわけることがある。

⑧ Quelques Minorités Ethniques du Nord-Indochine, (France-Asie, 92-93, 1954.)

⑨ この区別はラオ人によると専ら衣服によるという。男の上衣の丈、女のスカートなど。襞のあるスカートをはいているのがメオ・ラーイである。

⑩ Thailand, (H. R. A. F. Country Survey Series, 1957.) あるいは Thailand, Past and Pressent (1957)。また E. G. Sebastian; The Yao (The Jounal of the Siam Society, Vol. XIX. Part 2) 1925 にやや詳細な記載がある。

⑪ Beratzik, H. A.; Die Neue Grosse Völkerkunde, Bd. II. 1954.

⑫ Eickstedt, E. von; Rassendynamik von Ostasien, 1944.

⑬ Wiens. H. J.; China's March toward the Tropics, 1954. 本書全般の紹介として『社会人類学』一九五八、第二号に常見純一氏の「書評」がある。

⑭ Eickstedt, E. von; ibid. S. 148-161.

⑮ 凌純声、芮逸夫、湘西苗族調査報告、一九四七年。

⑯ 徐松石「粤江流域人民史」一九三九（井出季和太訳『南支那民族史』昭十六年）。

⑰ Benedict, P. K.; Thai, Kadai and Indonesian: a new alignment in Southeast Asia (Am. Anthropologist, Vol. 44. No. 4. pt. 1. 1942)。松山納「タイ語の系統に関する P. K. Benedict の異説について」(Area and Culture Studies 3, 1953)。

⑱ Eberhard, W.; Kultur und Siedlung der Randvölker Cginas, 1942.（ただし、Wiens. ibid. pp. 51-52.より引用）。

⑲ ラオス国内におけるヤオ族調査報告に関して筆者には未詳である。

⑳ ラオスの行政組織はムラ (Ban)――ムラグミ(Tasseng)、五、六ケ村――十ケ村を合したもの――グン (Muong) ――県 (Khoueng)――国 (Muan)となっている。

㉑ ココヤン・ビンローはヤオの村ではもはや成育しない。バナナ・サトウキビは村外の焼畑で栽培している。

㉒ イロリは土間の一部を割ってつくった粗末なもの、山地のため夜間はかなり冷え込み、これに薪をたいて暖をとる。もちろん、湯をわかしたり、煮物をすることもある。しかし食事の仕度はカマドでする。

㉓ 鉛はとかして径一、五～二糎位の女竹を縦に割いた節間にながし込んで置く。これが買売の単位である。

㉔ 服装について布地はすべてラオ商人より購入し自製しない。そのなかには毛糸・黒布など日本製品も多い。目下、女の衣服につける房飾りのビーズが不足して困却していた。耳環・項圏など銀製品は自製であり、買売は専らその重量による。彫刻の良否は問わない。また、指輪をつけている男もある。因にヤオ族の家々にはフイゴがあり簡単な農具・器具をつくる。フイゴはシナ式のそれである。その際、鉄は主にバンコック製の地金を購入している。

㉕ 公定レートにて1ドル35キップ。但し一九五七年現在。

㉖ ヤオ族の結婚式は次の次第で行われた。1、花嫁が花婿の家に到着し、祖霊を礼拝する。この時、花嫁の父、同村の娘た

ち数人が手伝いのため同行する。2、結婚式を行う。花婿の父が花嫁の父へ銀を贈る。筆者の参列した際には幅二、五糎、高さ一、五糎、長さ十一糎の銀塊（ラオ語で Ngun Yao、ヤオの銀あるいはオヤの貨幣という）一つ、植民地時代の銀貨を茶碗に八分目程を贈つた。この際、双方の父、村長及び有力者数名が参加し共食する。3、村人への被露宴を行う。4、結婚式の際の歌の一節は次のごとし。但し歌といつても呟くように唱える「蒐台造紙行嫁表、留伝大底衆人知、当初盤王至大底、置立天底万民修　至成女人嫁出外　男人長大頂香炉　上元甲子一千八百六十歳、至立人民天底図」（以下未詳、原文のまま）

㉗ 竹村卓二「傜族の社会組織に関する二、三の特徴について」（『社会人類学』一九五九年、第二巻、第二号）ここに記されている 'fong' ないし 'zong' が、小稿の chuan tsaou に当るようである。なお、ラオ語 sua diaw kan は一応 patri clan と考えうるが、patri sib と云つた方がよい面もある。別に論じたいと思う。

㉘ 宗教と神話一般については調査し得なかつた。但しいわゆる盤瓠説話に関しては少くともヤオ青年は全く知らない。もつとも前記、婚礼歌にその名がみえているが。

㉙ Sebastian, E. G.; The Yao, The Journal of the Siam Society (1925) によるとヤオ族は三つの祭壇をもつという。すなわち、1、先祖の霊を祀るもの　2、天を祀るもの　3、森と町の精霊を祀るものである。

㉚ 岩田慶治「北部ラオスにおける村落生活の秩序」（近刊）。

㉛ Frace-Asie; Quelques Minorités Ethnies du Nord-Indochine, 92-93, 1954. に誌されている Tsa-Khmu 族の語彙参照。

㉜ ヤオ族によると彼等自身のヤオ国があり、傜王は九江地方に居る由である。

monopolistic capital's control of politics is given up by the city capitalists and the workers who are both inclined to the interest politics. The Boss *Ruef's* administration appears as a mediator of the struggle in these three groups, dischargesits function of public welfare, which became urgent then, by means of private interests, bribery or buying-over, and is an illegal form of politics to fill the blank without coming public system or principle which operates this society.

The Formation of the Landlord System in *Kokuga's* 国衙 Territory

by

Kyôhei Ôyama

As in a period of the *Kamakura* 鎌倉 era in the *Wakasa* 若狭 country, the *Kokuga's* 国衙 territory in the middle ages occupied as large a territory as the manors did. This large *Kokuga's* 国衙 land changed largely itself by the dissolution of '*Gô*' 郷, the former tax-collection area, and by the newly establisheing '*Betsumyô*' 別名 at large since the end of the *Heian* 平安 era. The formation of *Betsumyô* resulted in the systematically authorized execution of *Kannô-ken* 勧農権, or right for promoting agriculture, by its lords to the peasants within the domains. As time went on, after the beginning of the *Kamakura* 鎌倉 era, this right was transformed into the *Shitaji-shinshiken* 下地進止権. Then the formation of *Betsumyô* means the concrete birth of the landlord system itself, and it motivated the inclination for systematically feudalistic constitution by the *Kokuga's* land, as a result of each member of *Kokuga* dividing the former *Gô* and forming many *Zaicho-betsumyô* 在庁別名 by changing the *Kokuga's* system according to each charge at the end of the *Heian* era.

The Minor Races in the Northern Laos

——especially on the *Yao* 傜 race——

by

Keiji Iwata

Each race, such as *Lao, Meo* 苗, *Yao* 傜, *Ga-Mu* (*Pu-Ten*) and

so on, in the northern Laos ranges variedly in each situation. This area is that of the complicated constitution of races and the very compound culture.

This article tries to clarify any racial relation around the *Yao* race, limiting area to the circumference of the *Pa-tan* country. At first offering the researching materials on the *Yao* race in the *Kaiso* country, especially on its life, its settlement, form of its houses, its social construction, and its religious aspect, its contact with other neighbouring races and its relation are to be shown, evaluating its reason for existence not as a minor race but a bearer of one provincial culture in the northern *Laos*. Near the *Pa-tan* country, there are the *Yao* and *Meo* races in the mountains, the *Pu-ten* race in the mountainside or mountainfoot, and the *Lao* race in the valley, cultural intercourse of these races enriches and develops the provincial culture as a whole. Without the *Yao* race the *Lao* race should be only a farmer in the valley —— not to develop its ability as a commercial race, without the *Lao* race the *Yao* race be isolated and retarded on the top of the mountains, and without the *Pu-ten* race no bearer and mediator between the two ——*Lao* and *Yao*—— be found. The point is that besides the examination [of the individual racial culture at work the order of the provincial culture constituted by these must not be overlooked. According to the approach in the racial geography, the provincial culture changes each racial culture, and is the leading factor having influence on history.

The Political Conditions at the End of the Ancient Period and the Contents of '*Gyokuyô*' 玉葉

by

Toshikatsu Nakamura

Many articles on the political history in the closing period of the ancient times which understood the period in the appearance of vicissitudes of the warring *Taira* 平 clan under the name of the so-called *Rokuhara* 六波羅 administration not always clarify concretely the developing substance of the *Taira's* administration and the principle of its ups and downs, which seems to be the premise of its transition to the Middle Ages but in reality the problem to be evaluated and understood in the complication of the rule of the cloisterd Emperor *Shirakawa* 白河 with the *Sekkan* 摂関 administration.

This article tries to research the political conditions in the central